

言語表現教材「いないいないばあ」の魅力

—保育学生の作品表現の分析と考察—

Attractiveness of the language expression teaching material “Peek-a-boo”
—Analysis and Consideration of Art Expressions of Junior College Students—

松本和美*, 松田聖子**

Kazumi MATSUMOTO, Syoko MATSUDA

I. はじめに

「いないいないばあ」は、赤ちゃんをあやす時に使う言葉、または動作のことである。一般的な動作としては、赤ちゃんの前で自分の顔を両手で覆いながら「いないいない」ととなえ、「ばあ」と同時に両手を顔からどけて赤ちゃんに顔を見せる。英語圏の「いないいないばあ (Peekaboo, Peek-a-boo)」は日本とは少し違い、自分の顔を両手で覆った後「ピーカブー！」と言い、両手を顔からどける。フランス語では「Cache-cache cou-cou (カシュカシュ・クーター)」、ドイツ語では「Gugus dada (グーグス・ダーダ)」、イタリア語では「Bao baocette (バオバオ・シェッテ)」など、言い方は様々だが、びっくりするほど似たりズムで赤ちゃんを喜ばせる。



日本の絵本のベストセラーである松谷みよ子の「いないいないばあ」は、赤ちゃんが初めて出会う一冊であり、世代を超えて読みつがれている。絵本のページをめくると、ねこ、くま、ねずみなどの動物たちが繰り返し「ばあ！」

と語りかける。単純な繰り返しで赤ちゃんの心をとらえ、笑顔を導き出す「いないいないばあ」の魅力についてその意義について考察した上で、保育現場での活用を踏まえ、学生による言語表現教材としての活用について考察する。

II. 記憶力・想像力・予測力の芽生えを促進する

「いないいないばあ」

生後まもなく、赤ちゃんはモノが「見えなくなる」と「なくなる」の区別がつかない。見えなくなったものは、すべて「消えた」と思ってしまう。ところが個人差はあるものの、自我が芽生え自己と他者の分離が始まるお

およそ生後6か月以降から、「見えなくなっても隠れているだけで、そこにある」とわかるようになる。一時的に物事を覚えておく「短期記憶」(ワーキングメモリー)の力が芽生えてくるからである。「いないいないばあ」をしている相手を他者として認識し、「いないいない」という一時的な分離から再会を予期した後に、「ばあ」と予期通りに再会が叶うことに喜びや興奮を感じているものと思われる。これはダンドリを記憶する力や想像力、予測力、期待する気持ちが育まれたからこそできる、高等な遊びでもあると言える。

III. 言語コミュニケーション力を促進する「いないいないばあ」

内田伸子(2015)は『「いないいないばあ」が記憶力に結びつくのは生後10か月ごろ。この頃の赤ちゃんの頭の中では、記憶をつかさどる海馬という部分が劇的に活発化する。この記憶力の誕生が『「いないいないばあ」を喜ぶことと密接な関係がある。海馬の前にあるのが扁桃体で、快・不快感情を喚起する場所である。赤ちゃんが快適な状態にある時は海馬がイキイキと働き、記憶もどんどん蓄積される。しかし、不快な状態だと記憶機能全体の働きが低下する。』と述べている。また、『「いないいないばあ」をして赤ちゃんがたくさん笑うことで、扁桃体が『快』と感じ、海馬が活発に働く。それが記憶力アップにつながる。ママも思わず笑い返すので、相乗効果でどんどん楽しくなっていく。これは人と人が働きかけることの基本であり、コミュニケーション力を養うことができる。』とも述べている。このように母子間におけるコミュニケーションとしての「いないいないばあ」は親子の相互同調作用とは異なり、会話とは異なる応答方法であり、快感情による人とのやり取りが、前言語コミュニケーションから言語コミュニケーションへと導く思考の発達形成に重要な役割を果たすことになるのである。

*〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部 保育科

**帝京平成大学 人文社会学部 児童学科

IV. 言語表現教材としての「いないいないばあ」

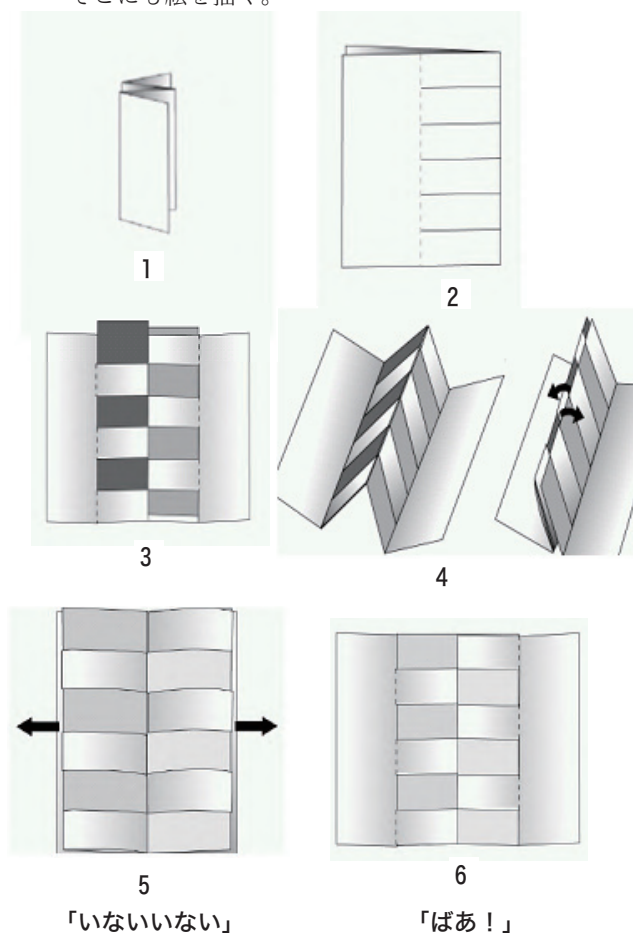
2～3か月位のまだ寝ている赤ちゃんに、小さめの薄いガーゼを顔に落とし覆って行なったり、ガーゼを揺らして目で追わせたり、覆う時間を短くしたり長くしたり、リズムに変化を持たせてみる。

親が手で顔を隠す方法や、カーテンや衝立の後ろから顔をのぞかせるなど、対面での関わり遊びとしてだけではなく、モノを介しての「いないいないばあ」遊びは、見ている場面や物が、思いもよらないモノに変化する『驚き』に快感情を刺激されると言える。「いないいないばあ」絵本の多くは様々な動物や友達が変化することを楽しむ。

この繰り返しと変化の面白さを、保育現場で活かすことができるのではないかと考え、学生たちは、様々な言語表現教材のとらえ方を工夫して言語表現教材を作成した。

V. 画用紙を使ったお話「いないいないばあ」制作について

1. 画用紙をWに折る。
2. 真ん中から1/4に切り目を入れる。
3. 幅が1/4の紙を2で切った切り目に交互に差し込む。
4. もう一度Wに畳んで、真ん中から指をかけて開く。
5. 開いたところに絵を描く
6. 後ろの羽を持って引っ張ると、大きな場面になる。
そこにも絵を描く。



VI. 学生による言語表現教材への取り組み

(a) 対象学生 T大学短期大学部保育科

1年 113名

アンケート調査提出 102名

(b) 実施期間と方法

『子どもと言葉』授業内で課題として、「いないいないばあ」を製作する。作品を教育実習で実践できる学生は挑戦してみる。その後に作品についてアンケート調査を行う。

製作期間：2022年9月26日～10月10日

教育実習：2022年11月7日～11月18日

(c) 倫理的配慮

この論文は帝京平成大学「人を対象とする研究に関する倫理審査」の承認を得て行った（承認番号：2022-147）。学生には研究の目的や研究内容と方法、個人情報の保護に関して説明を行った。合わせて研究への協力はいつでも中止できること、それによる不利益は一切生じないことを説明した。その上で、データ公開の同意を得た。さらに本論文を発表するにあたり、改めて学生に対し、研究の目的と概要を説明し、発表することに抵抗を感じる、異論のある箇所がある等があれば指摘していただきたい旨を伝えた。その結果、修正を依頼された箇所はなく、論文発表の許可を得た。

VII. 結果と考察

表1 いらないいないばあ区分と絵の内容

		人	動物 生き物	キ ャ ラ ク タ ー	食 べ 物	そ の 他
自己紹介	12	7	4	0	0	1
変身系	46	2	23	0	6	15
いないいないばあ	16	1	12	3	0	0
おはなし	14	0	0	14	0	0
保育の場面で導入	9	3	1	0	3	2
その他	5	4	0	0	1	0
計	102	17	40	17	10	18

(1) 制作の内容

学生の制作の内容は表1に示した通りである。いないいないばあの内容を6つに分類したところ、変身系が46作品と一番多くなった。「いないいない」と「ばあ」の場面展開を利用し、何かから何か（卵から恐竜・雨空から晴れ空等）への変身を考えた学生が多かったということがわかった。「いないいないばあ」そのものも16作品あったが、いないいないばあ遊びの対象年齢を考えると、学生が目前に控えている幼稚園実習にはそぐわないと考えた学生もいたようである。おはなしが13作品、自己紹介が12作品となっ

たが、おはなしは学生自身が好きなおはなしや、子どもに読みたい絵本から場面を選んだ作品が多く見られた。自己紹介については、他の授業内の中で実習で使用できる自己紹介の児童文化財を制作していたこともあり、この数になったのではないかと考える。

以下、それぞれの作品の特徴に触れ写真を紹介する。

【自己紹介】

「私の名前は→○○○○」といった分かりやすい作品が多く見られた。また写真のように、いないいないばあと合わせ自己紹介をしているものもあった。保育現場では実習を含め、自己紹介の機会が多くある。学生はその場面を想定して制作したことが考えられる。たぬきが変身すると、学生自身が出てくると、子どもたちは、本人と見比べながら親しみを覚えることができる。



【変身系】

変身に分類されるものとしては、木から動物が出る、天候の変化、材料から料理ができあがるなど学生の工夫が見られる作品が多かった。クイズとして使用できる作品もあり、場面を選ばず、保育のちょっとした時間等で使用できると考えられる。

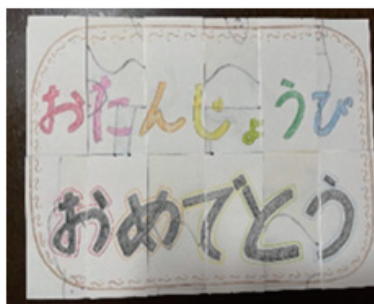


【いないいないばあ】

今回の制作の題名が「いないいないばあ」だったこともあり、学生には「いないいないばあ」のイメージが強かったと考えられる。動物か子どもが好むアニメ等のキャラクターを使用して制作した学生がほとんどであり、比較的低年齢を対象にした作品が多く見られた。

【保育の場面での導入】

こちらでは行事としてハロウィンやクリスマス、誕生日会で使用できる作品が見られた。また通常の保育場面で使用するものとしては、写真のような「お願い」や泣いている子どもが次の場面では友達と楽しそうにしている様子、など学生が子どもの姿を考え、保育の中の場面設定を行った作品作りを行ったことが分かる。



【その他】

その他では、動物の後ろ姿からイメージを膨らませるものなど、学生が「いないいないばあ」の作品の特性を生かし自分自身で考えたストーリー性のあるものを中心となっている。キャラクターも既存のものではなく、個性的なものが多くなっている。



(2) 実習中に実践した学生の事例

次に教育実習において、実践した事例についてアンケート調査を元に考察する。

事例 1

作品：いないいないばあ

年齢：5 歳児

場面：部分実習

反応：とても良かった

具体的な子どもの様子：子どもたちはとても興味をもち、何度も「見せて」と言ってきた。

不思議や疑問をもった子どもが部分実習後に寄ってきてしかけを知りたがった。

事例 2

作品：おはなし「シンデレラ姫」

年齢：4 歳児

場面：帰りの会の前 部分実習

反応：とても良かった

具体的な子どもの様子：「先生すごい!」「やってみよう」との声が挙がり、子ども達に回して一緒に行った。

事例 3

作品：その他 びっくり箱

年齢：満3 歳児

場面：活動の前

反応：とても良かった

具体的な子どもの様子：「うわ〜びっくりした!」と大爆笑だった。

事例 4

作品：その他 ペットボトルの噴射

年齢：3・4・5 歳児

場面：移動の待ち時間

反応：良かった

具体的な子どもの様子：3 歳児→近寄って大騒ぎ 4 歳児→静かに見る 5 歳児→静かに見て作り方を知りたい様子。

事例 5

作品：いないいないばあの自己紹介

年齢：3 歳児

場面：帰りの会

反応：あまり良くなかった

具体的な子どもの様子：子どもたちは注目してくれたが、無反応だった。保育者が「かわいいね」と言ってから子どもたちも「うん、かわいい」と反応した。

(3) 事例の考察

学生たちは、初めての幼稚園での実習に際し、子どもたちの前に立って保育をする。その緊張感の中、なかなか自分の手作り教材を出して子どもたちに展開することは難しかったと思われる。どのタイミングで提示するのか、発達年齢に合っているのか、保育のカリキュラムに沿っているか等、指導計画の段階で考えなければならないことが多々ある。しかしながら、まずは子どもの前に立ったところで、

自発的に自ら表現してみることが重要なのだ。クラスの子どもたちの注目を一身に浴びて、子どもたちと『共感する』喜びを得ることは、まだまだ難しい。

学生へのアンケート調査から、子どもの反応が良かったという事例に関しては、対象年齢が合っていたこと、学生が作品をただ見せるだけでなく、導入を工夫して行った様子が見られた。「自分の緊張が子どもに伝わってしまい楽しめなかった」という記述からも見られるように、学生自身が子どもに作品を見せることを楽しむことができると、子どもにもその楽しさが伝わったのではないかと考察する。

子どもたちの反応が良くなかった事例では「いないいないばあ」が幼かったこと、自己紹介の名前を文字で表していたため、字が読めない3歳児には楽しくなかったのではないかと反省している。言語表現教材は子どもの年齢や時期に合わせ、楽しく表現する必要があることが理解できる。

Ⅷ. まとめ

今回は保育の現場において、子どもたちとコミュニケーションを取り、子どもの興味・関心を捉えて共に楽しむための一手段として、手作り教材を教育実習で使うことを目的に制作を行った。

学生たちは、この「いないいないばあ」の言語表現教材を制作することで以下の2点についての学びがあった。

- ① 保育の工夫をオリジナルで考案する。
- ② 自作の言語表現教材を使って子どもたちとコミュニケーションを取るために、言葉を選んで語ろうとする。

学生たちには、この教材づくりをきっかけに、目の前にいる子どもたちに合った保育を創り上げ、表現する楽しさを感じる心を持った保育者に育ってほしい。

<参考文献>

- ・内田伸子 育児専門誌「AERA with Baby」6月号 2015
- ・今井康晴 「言語獲得支援論に関する一考察 母子遊び「いあいないばー」をめぐる保護者の意識調査を中心に」東京未来大紀要 pp.19-24 2012
- ・伊藤良子 「乳児におけるイナイイナイバー遊びの発達と永続性との関係」東京学系大学特殊教育施設報告 36 pp.83-90 1987
- ・松本和美 「保育に役立つ言語表現教材」(株)みらい 2018
- ・松谷みよ子 「松谷みよ子あかちゃんの本 いない いないばあ」童心社 1967
- ・正置友子 「いないいないばあ：遊びと絵本」日本乳幼児教育学会第24回大会研究論文集 2014

※帝京平成大学「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」(承認番号：2022-147)